とうきょうすくわくプログラム活動報告書

ベネッセ西馬込保育園
大田区仲池上１－８－２
（株）ベネッセスタイルケア

１．活動テーマ

表現：砂、自然　　対象児：２歳児クラス

＜テーマの設定理由＞

園庭があることで、植栽が30種類あり四季を感じたり、砂場もあり戸外での遊びの中心になっている。その環境を活かした活動を取入れている。室内でも感触遊びや小麦粉や片栗粉粘土、油粘土遊びも活発に行ってきた。様々な感触を体験し、自分のイメージした物を形にしようとしたり描いていく経験を更に深めていくことで自分らしく表現することの喜びへと繋がっていくと考えている。
自然物や砂を通して、心のままに表現して遊ぶその子らしさを大切に育んでいく。

２．活動スケジュール

４～6月・・・園庭でさまざまな状態の土に触れる。（ダンゴムシ探しに夢中）
7～8月・・・小麦粉や片栗粉粘土の感触遊び
９月・・・土粘土に触れる
１１月・・・造形の荒井先生と園庭の砂遊び体験
１月・・・土粘土

３．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

・砂、シャベル、小麦粉、片栗粉、土粘土（リース）、粘土板（リース）、一人一枚の雑巾、ブルーシート

４．探求活動の実践

＜活動の内容＞

４月・・・砂場に型抜きカップやコップ、シャベル、バケツを用意し自由に使って遊ぶ
⇒一緒に遊びながら、使い方を視覚から知る。そしてまねしてみようとする。
バケツに砂をいっぱい入れてひっくり返す、バケツの底をたたいて中の砂が落ちるようにする姿が見られた。
バケツの形に砂が抜けた時の達成感とそれを崩す面白さを繰り返す。

5～６月・・・砂場の遊具を使ってままごとあそび。砂を料理の材料として鍋やカップに入れた出したりして遊ぶ。型抜きも上手になり、「ケーキだよ」と見立て遊びが始まる
カップに入れる砂もカップいっぱいに入れ、平らにするとひっくり返した時にきれいなケーキになることを知る。
片手鍋を型抜きに挑戦するが難しい。
複数人のこどもたち大人で山をつくりだす。どんどん大きくなる山の上に穴をあける。
⇒ケーキつくりをして遊んでいた子は、その山をみて大きなケーキにみえるから、そこから山つくりは終わってケーキつくりとなる。

7～8月・・・幼児クラスの農園レストラン（ピザ cooking）の様子をみて、小麦粉粘土で自分たちもピザ作りに挑戦。小麦から水を加え粘土状に固まっていく様子をわくわくしながら見ていた。いざ始めると感触を

味わい、保育者のようにこねたり、小さくちぎってみたり、長いく伸ばして「へび～」「パンだよ」と自分なりに見立てて遊ぶ。いよいよ幼児クラスに憧れを持った子どもたちのピザ作りがはじまる。自分の経験値から「これチーズだよ」「ハムものせよう」などと次々に言葉が出てくる。手作りにピザ窯に入れ焼くことで、「おいしそう」と香りまで想像できた子どもたち。

9～1 月・陶芸家の先生をお招きして、自分らしく表現するということで、はじめて土粘土に触れてみる。
これまで遊んでいた小麦粉粘土や油粘土との違いを感じる。硬さ、におい、温度など。なかなか触れようとせず、じっとみつめていたり、遊びだしたお友達の様子をみたりと一人ひとり思い思いの姿が見られた。講師の先生の声がけのもと、手だけでなく足で踏んでもいいことを伝えられると立ち上がり踏んでは、「つめたーい！」「かたい」など自分で感じたことを言葉で表現する。その後いつもの粘土遊びのように、自分なりのイメージで作ってみようとしたり、ひたすら叩いたりちぎったりという遊びの子など集中して遊ぶ。こどもたちの頭の中で浮かんでくるイメージを壊さないような声がけを講師の先生から実践しながら学ぶ。

１１月の園庭の砂遊びは、玩具は、バケツとシャベルのみ。テーマは砂。砂にも地面の砂と砂場の砂畑の土などの違いを感じる。山を作って、園庭の白い砂を上からかけて富士山みたいとイメージする子もいた。その後、貝を見つけて「どうして海じゃないのに？」と園庭の砂から見つけた貝や素敵な石は自分の宝物にして大事そうにバケツでコレクション収集。遊びの展開。砂からの自然への興味関心が増す、保育者の言葉加減の大切さを保育者も学ぶ。

最後の土粘土は、これまでの床から机上遊びへと環境を変える。自然の事象に興味を持ち砂という素材にも興味関心が今回の土粘遊びでも、自分の思うままに形を見立て遊びに集中する姿が見られた。机上になったことで他児と同じ目線になり、自然と会話が生まれ、共同的なあそびの芽が生まれ始めた。
幼児クラスに進級しても表現遊びを粘土や絵具等も使って遊びを展開していく予定なので、更なる成長が期待できる。

活動の様子がわかる写真、2 枚以上

５．振り返り

土粘土 → 自然の砂 → 再び土粘土という流れの保育を通して、こどもたちが自分なりに表現しようとする姿から、一人ひとりが持つ感性の豊かさに保育者は気づくことができた。

・保育を進める上で大切なのは、こどもの姿を見守りつつ、必要な場面で適切な声かけを行い、こども理解を深めていくことである。

・一人の子に向けた言葉であっても、その声は周囲の子どもたちにも届き、心が動いていく場合がある。

・この時期は、形が大きく変わらなくても、こどもたちなりの「みたてあそび」へと発展していく。たとえば、身近なケーキをイメージしながら作る姿が見られた。

・きょうだい児の有無など、それまでの経験値の違いによって、見立てる表現の広がりにも差が出てくる。

・土粘土に触れる経験を通して、自分の思いを自分なりに見立て、表現する喜びを２歳児なりに感じられた活動となった。

・次年度も、砂や粘土遊びを継続し、こどもたちの感性が育まれていく様子を丁寧に見取りながら、**自分らしく表現する喜びや自信へとつながる成長**を追っていく予定である。